

「全歴研・関歴研参加記」

—新たな歴史教育へ続く模索—

中央大学附属横浜中学校・高等学校 柴 泰登

1 全国歴史教育研究協議会 第63回研究大会（茨城大会）

2021年度に引き続き、2022年度の全歴研は、Zoomを用いたオンライン形式（本部：茗溪学園高等学校）で2022年7月27日（水）・28日（木）に開催された。大会テーマは「新しい歴史教育～学びへの多様なアプローチ～」で、27日（水）に第2～5分科会の発表、28日（木）は第1分科会と記念公演が行われた。

初日に私は『「世界史探究」の可能性を探る』をテーマとする第4分科会、「学びへの多様なアプローチ」をテーマとする第5分科会に参加した。特に櫻井幸一郎氏（茨城県立土浦第二高等学校）による「知識の概念化と歴史学習-コンテンツ・ベースとコンピテンシー・ベースのはざままで」の発表は、知識をどのように体系化して概念として生徒に理解してもらうかについての理論を精緻に言及したうえで、豊富な図像資料を用いて生徒の思考力・判断力・表現力を養成する授業の実践例を紹介したものであり、非常に参考になった。

2日目は、まず「新しい歴史教育-高校生が歴史を学ぶ意義-」をテーマとする第1分科会に参加した。ここでは伊藤純郎氏（筑波大学教授）を座長とし、5名の高校教員とともにパネルディスカッションが実施された。ここでは歴史を学ぶ意義、間を誰が立てるのかなど、新課程が開始されるなかで話題となっている事柄について改めて議論された。午後は、村井章介氏（東京大学名誉教授）による記念講演が行われた。村井氏は「世界史」と「日本史」をどう総合し、どう振り分けるか」というテーマで話を展開したが、琉球などマージナルな地域もフィールドとして研究を続けてきた氏らしく、従来の時代区分や地域区分について改めて疑問を呈し、「境界史」の重要性を説く非常に示唆に富んだ講演が行われた。

2 令和4年度 関東歴史教育研究協議会（埼玉大会）

2022年度の関歴研は12月10日（土）埼玉県春日部高等学校を会場とし、対面形式にて開催された。この大会では、最初に小林聡（埼玉大学教授）による「グローバル＝ヒストリーの手法による『新しい歴史の捉え方』-6世紀とその後-」というタイトルで、6世紀から8世紀にかけてのアフロ＝ユーラシア世界をグローバル＝ヒストリーの視点で考察する講演が行われた。小林氏による講演の中で個人的に印象に残ったのは、「突厥を中心として国際関係を考えると6世紀は理解しやすい」という氏ならではの独自の視点からの指摘と、「LALIA」と呼ばれる地球規模の寒冷期が6世紀半ばに訪れ、歴史上の出来事の背景となっているという最新の知見であった。

続いて高校教員からも2名の発表があった。武井寛太氏（埼玉県立与野高等学校）による「学習科学の知見に基づいた歴史総合の単元設計」と、金間聖幸氏（埼玉県立大宮北高等学校）による「歴史教育のDX-Google classroomを活用した観点別評価」である。知識構成型ジグソー法の旗手として有名である前者は、そこからさらに進んで「構築主義」の考え方に基づく単元設計の重要性を説いた。また後者の発表では、「DX化が教員の教育活動にマイナスになるのでは意味がない。プラスにしてこそ意義がある。」という発言があったが、氏の発表はそれを実現させるための具体的な方策を詳細に紹介してくれるもので、非常に有意義な発表であった。